

Dharmakīrti の推理論

——Apoha 論との関連から——

赤 松 明 彦

思考が、それ自身のうちにすでに二つの契機、すなわち、〈思考するもの〉としての主観的契機—認識と、〈思考されるもの〉としての客観的契機—存在をふくむものである以上、そのいずれの一項を特に取り扱うか、更にその二項の連関をどうとらえるかによつて、それぞれの論理学の傾向もおおのずと決定されよう。その意味で、認識作用の側面をより重視した知識論体系を確立したのが、Dignāga であるとすれば、Dharmakīrti は、師の知識論に対して、存在論的な根拠を付与しようとする内的要請を持っていたこと、既に別に指摘した如くである¹⁾。少なくとも、Pramāṇavārttika-svavṛtti (略号 PVSV) においてはそうである。本論は、彼の推理論、時にその論理的随伴関係 (vyāpti) の主張の中にも同様の傾向が見てとれることを明らかにし、更に、それと Apoha 論との関連を明確にすることを目的とする。

1. 周知の如く、Dharmakīrti は、必然的随伴関係として、「sādhana-dharma が sādhyadharma の結果 (kārya) であること」(tadutpatti) 及び「sādhana-dharma が sādhyadharma それ自体〔の本質〕であること」(tādātmya) の二種のみを認め、これを、論理的随伴関係の根拠とした。

Dignāga は、論理的随伴関係をこのような存在論的側面から類別することはしていないが、煙から火の存在を推理する場合と、「所作性」によつて声音の「非恒久性」を推理する場合の相違には気づいていたであろうことは、Pramāṇasa-muccaya (略号 PS) 第二章 kk. 12-25 の議論から見てとれる²⁾。しかし、結局は、論理的随伴関係を遍充関係として形式的にしかとらえていないことは明らかで、PS II kk. 22-25 の議論に見られる如く、liṅga=vyāpya=gamaka, liṅgin=vyāpaka=gamya という形での liṅga-liṅgin の関係の一定方向性を確立したにとどまる。そして、「非恒久性 (anityatva)」という liṅgin と「所作性 (kṛtakatva)」という liṅga は同延同義であつて、その場合 liṅgin=vyāpya, liṅga=vyāpaka としても推理は成り立つではないかという主張をしりぞけて、liṅgin=vyāpaka であつて始めて、「所作性」の存在空間から「恒久性」が排除されるのであり、それ故、「所作

性」と「非恒久性」との論理的随伴関係が成り立つと主張するのである。ここに見られる *linga-lingin* 関係の一定方向性の主張は、排除 (=アポーハ) に言及される点を除いて、後に *Mīmāṃsā* 学派の Kumārila が論理的随伴関係 (*vyāpti*) について主張しているものと全く同じであることは注意しておいてよい³⁾。

上述の如く、*Dignāga* は、論理的随伴関係を遍充関係という定式にして、彼の創設になる *Apoha* 論とも関連させて確立したのであるが、その際、その関係がいかなる(存在論的)根拠の上に成立し、いかにして我々によつて認識されるかについては問うことはしない。それについては、*Dharmakīrti* を待たねばならないのである。ちなみに、*Kumārila* は、その様な遍充関係が「繰り返された知覚によつて理解されること (*bhūyodarśanagamyā ca vyāptiḥ*)⁴⁾」を主張して、論理的随伴関係が経験的な帰納の原理であることを認めている。

2. 「論理的随伴関係は *Svabhāvapratibandha* に基づく」⁵⁾これが、*Dharmakīrti* の主張の第一である。それは、

I. *tadātmatva*: *A* が *B* の *Svabhāva* であること。

II. *tadutpatti*: *A* (結果) の *Svabhāva* は *B* (原因) から生じること⁶⁾。
のいずれかの事実の上に成立する「実在の本質 (*Svabhāva*) を介する結合関係 (*pratibandha*)」に基づいて論理的随伴関係が成立するということを主張するものである。

この内、*Apoha* 論と密接に関連するのは、I. であるので、以下、I. について考察する⁷⁾。

Dharmakīrti によれば、I. の場合には、「*Svabhāva* (*B*) は *Svabhāva* (*A*) の存在に必然的に随順するもの (*bhāvamātrānurodhin*)」であつて、そこでは、*B* に対する *A* の不可離関係 (*avinābhāva*) が成立する⁸⁾。よつて、*A*=*sādhana*dharma, *B*=*sādhya*dharma として論理的随伴関係が成り立つと認められるのである。これは、実在の場における *A=B* という同一性に基づいて論理的随伴関係が成立することを主張するものである。こうして、論証的推理の前提となる論理的随伴関係に対して存在論的根拠が付与されたわけであるが、では我々は一体いかにしてこの関係を認識し確定するのか。後期の *Hetubindu* においては、それは別の *Pramāṇa*, すなわち、(*sādhya*viparyaye hetor *bādhakapramāṇa*) によると述べられるが⁹⁾、*PVSV* においては、単に (*drṣṭānta*) によつて示されるとしか説かれていない。例えば、*kṛtakatva* と *anityatva* の随伴関係に関しては、「それ自身の原因から *kṛtaka* なものとして生じてきたものは、同時に、一瞬間のみ存在すると

いう性質をもった滅すべきものとして生じてくる」というのは、経験的に知られている原理であり、これが 〈dṛṣṭānta〉 によつて示され理解される¹⁰⁾と説明されるのであるのである。

ここに見られる様に、論理的随伴関係は、Dharmakīrti にとつても、経験的事実から導き出される帰納的原理によつて確定・理解されるものなのである。但し、それに対して存在論的根拠が付与されている点は注意されねばならない。

3. 上述の如く、 $A=B$ という実在の側の同一性に基づいて論理的随伴関係は成立するのであるが、これに対して、實在論の立場からの反論が当然予想されよう。すなわち、實在レベルで同一のものは認識レベルでも同一であり、両者の区別はなく、したがつて、例えば、「所作性」と「非恒久性」の間に論理的理由と論理的帰結という関係は成立しないと考えられるのである。「声音には非恒久性がある。所作性故に」は「声音には非恒久性がある。非恒久性故に」と言明しているのと同じであつて、推論式として無意味であると言うのである¹¹⁾。そこで、この様な反論をしりぞけ、〈tādātmya〉に基づく論理的随伴関係の正当性を主張するために展開されることになるのが、Apoha 論なのである。

4. 實在の本質 (Svabhāva) は本来、言葉によつて表示されえないものである。我々は、その様な本質を概念的・分析的思惟によつて弁別し、あたかもそれ自体が實在の本質〔的属性〕であるが如くに、“kṛtakatva” とか “anītyatva” とかといった語を使つて表示するのであるが、この様に分析されて言表された属性は、概念としての属性に外ならない。しかも、「概念的・分析的思惟によつて弁別された」とは、「他者の排除 (anyāpoha)」という思惟作用によつて仮構されたということの意味するのである。このことを、上述の論理的随伴関係の問題にあてはめて考えてみるならば、論理的理由として示される kṛtakatva と論理的帰結として示される anītyatva は共に概念化された属性であつて實在そのものではない。したがつて、それらを表示する語は、それぞれその意味対象として相異なる概念をもつのであり、たとえ同一の存在に言及するものであつても、その意味表示機能において別々の作用をもつということになる。そこで、論理的理由と論理的帰結の関係が概念間の関係として確定するのである。

すべての實在は、その本性によつて、それ自身の本質において確定されているのであるから、同類のものからも異類のものからも区別されてあるものである。それ故、それぞれ特定の諸個物には、甲や乙などのものからの区別 (異他性) がある。その様な区別 (異他性) を根拠とし、かつその様な〔異他性としての〕特徴を〔総括的に〕とらえる

種々の概念が人によって想定されるのである。それ故(種々の概念が想定されることに基ついて)或る〔例えば「非恒久的(anitya)」という〕属性を示す語によつて知られる〔「声音」という実在のもつ〕ある特性(異他性, すなわち「恒久的(nitya)」なるものからの異なり)は, それ以外の属性を示す語〔例えば, 「所作的(kṛtaka)」等の語〕によつては知られない。したがつて, 「非恒久的」と「所作的」の〕確定が別々なのである。[しかし, 実在個物の属性としてそれらが, 実際に分割されて存在しているのではない。] (PVI. kk. 40-42)

すべての実在個物は他の様々の実在個物から相互に区別されて存在している。我々は, その内の1つの区別, すなわち他者との異なり(異他性)を特に取り出して, それをある属性を示す語によつて言表するのである。それ故, それぞれ属性を示す語は, それが排除する対象を異にしているのである。「所作性」という語は「作られたものでないもの」を排除し, 「非恒久性」という語は「恒久的なるもの」を排除するのである。それ故, それぞれの語の意味対象は異なるのであり, そこでは, 概念間の関係としての論理的随伴関係も当然成立する。

Dharmakīrti は, この様にして, (tādātmya) に基づく論理的関係の妥当性を論証するのである。そして, この論証を発端として, PVIにおいて, 概念論・言語理論としての Apoha 論が展開されることになるのである。

〔略号および使用テキスト〕

PVI The Pramāṇavārttikam of Dharmakīrti, the First Chapter with the Autocommentary. Ed. R. Gnoli, Roma 1960.

PVSV Pramāṇavārttikasvavṛttiḥ: cf. PVI.

HB Dharmakīrti's Hetubinduḥ. Teil I, Tibetischer Text und rekonstruierter Sanskrit-Text. Ed. E. Steinkellner. Wien 1967.

- 1) 拙稿「ダルマキールティのアポーハ論」『哲学研究』第五百四十号, 京都, 1980.
- 2) 北川秀則『インド古典論理学の研究』東京, 1973. pp. 110-125. 参照。
- 3) Ślokavārttika, Anumāna, kk. 4-9.
- 4) *ibid.*, k. 12ab.
- 5) Cf. PVSV, p. 2. 19f; p. 8. 12f; p. 17. 12f.
- 6) Cf. PVSV, p. 3. 3.: kāryasyāpi svabhāvapratibandhaḥ/ tatsvabhāvasya tadutpatter iti/
- 7) II. については, 梶山雄一 *Trikapañcakacintā* 『インド学試論集』4-5, 京都, 1963.
- 8) Cf. PVI, k. 39; PVI, k. 2cd; NB. II, 15; HB, p. 5. 11f.
- 9) Cf. HB. p. 4. 3f.
- 10) Cf. PVSV, p. 17. 18f.
- 11) Cf. PVSV, p. 24. 16f.

(京都大学大学院)